令和７年度東京都自立支援協議会セミナー
当事者が望む地域生活を支える相談支援とは何かを考える

【基調講演】
相談支援の現在地とこれから　～当事者の“こう暮らしたい”に寄り添う地域づくりを目指して～
福岡　寿（特定非営利活動法人　日本相談支援専門員協会　名誉顧問）

＜議事要旨＞

１．「相談支援」という仕事の本質

長年、相談支援という仕事に関わってきましたが、その本質は今も昔も変わらないと感じています。それは、相談支援は「直接何かをしてあげる仕事」ではなく、「人や制度、地域の関係性をつなぎ直し、支援が機能する土壌を整える仕事」だということです。

若い頃、地域にはほとんど社会資源がなく、在宅で暮らす障害のある方やご家族のもとを訪ねても、具体的なサービスを紹介できない場面が多くありました。そのたびに、無力感を覚え、「自分は一体何の役に立っているのだろうか」と悩んだこともあります。

しかし、今振り返ると、制度がなくても、資源がなくても、話を聞き続け、関係を切らさずにいることそのものが、後の支援につながる重要な営みでした。現在は制度もサービスも整備され、当時と比べると選択肢は格段に増えました。ですが、その分、相談支援が「制度の調整役」に矮小化されてしまう危険もあります。

相談支援とは、当事者の「こう暮らしたい」という思いを軸に、人や仕組みが自然に動くよう整える仕事であり続けなければならないと考えています。

２．重層的な相談支援体制が地域にもたらす意味

今日の講演で最も強調したかったのは、相談支援は単独の機能では成り立たない、という点です。計画相談だけが整っていても、委託相談だけがあっても、地域は十分に機能しません。

日常の暮らしの中で生じる細かな困りごとを受け止め、整理し、必要に応じて関係者をつなぐ役割と、その積み重ねから見えてくる課題を地域全体の仕組みに反映させていく役割が、重なり合って初めて相談支援は力を持ちます。

私はよく、車が脱輪して困っている場面の例え話をします。多くの人が困っているのを見ながらも通り過ぎていく中で、相談支援は車を一人で持ち上げる人ではありません。相談支援は「ちょっと、ちょっと」という言葉が得意です。通り行く人たちに「（ちょっと）待ってください」と声をかけ、人を集め、それぞれの得意な役割を整理し、全体を見ながら支援が動くように調整する存在です。この「直接は動かないが、動きが生まれる場をつくる」役割こそが、重層的な相談支援体制の中核であり、相談支援の専門性だと私は考えています。

３．顕在化させないための多職種連携の重要性

問題が大きく表に出てから支援を組み立てるのでは、当事者や家族に大きな負担をかけてしまいます。例えば、医療的ケアが必要な子どもが入院している場合、そのときに計画相談の出番はありますか、ないですよね。では、誰が行くのでしょうか。もし重層的相談体制ができている地域であれば、その段階で退院後の生活を見据え、保健師や委託相談、医療的ケア児等コーディネーターなどが関わることができ、ご家族の不安を大きく和らげることができます。退院してから慌てて支援を探すので

はなく、「その先の暮らし」を想像しながら準備を進めることが重要です。

発達特性をめぐる支援についても同様です。子どもは生まれた瞬間に診断名を持つわけではありません。最も望ましいのは、誰もがそれぞれ特性を持っているけれども、その特性は特性のまま伸びていけばよいということです。しかし、特性に合わない環境や不適切な関わりが続くことで、二次的な困難が生じ、その結果として診断につながるケースを数多く見てきました。こうならないための一番大事な委託相談の前さばきは何かというと、適応障害や発達障害にしないという多職種連携を始めることなのです。

さらに、個別的な努力では対応が難しい場合には、健診後のアフターフォローや保育園の段階で適応障害にならないための取り組み、そして幼稚園・保育園・小学校といった縦横の連携を進めることが大切になります。そのようなときには、自立支援協議会の子供部会を活発にする必要がありますし、関係者に集まってもらい、出生からの縦横連携をきちんと実施することも当たり前の取組でしょう。委託相談や基幹相談支援センターが十分に機能していない地域や、計画相談しかない地域では、可逆性が高くて頑張れるお子さんに対しても、自動的に児童発達支援につなげることが正しい仕組みだと誤解されていることがあります。

相談支援の役割は、制度の入口で待つことではなく、健診後や保育園段階など、もっと早い時期から多職種をつなぎ、問題を「顕在化させない」ための調整を行うことです。問題を潜在的な状態に留めることは、決して何もしないことではなく、極めて重要で価値のある支援なのです。

４．計画相談が形骸化しないために

計画相談そのものを否定するわけではありませんが、既に決まっているサービスを後から整えるだけの作業になってしまうと、相談支援専門員の専門性ややりがいは発揮されにくくなります。入所施設や放課後等デイサービスの場面で「今の暮らしを続ける」という言葉が並ぶ計画を何度も目にしてきました。

長野の基幹相談支援センターの所長をしていたとき、そのセンターにいる力のある相談支援専門員たちに、「自分ってさ、みんながやった事例を、さも自分がやったように外で吹聴して歩いてるだけの人間かな？」と聞いてみたことがあるんです。そうしたら、「とんでもないですよ。福岡さんは毎月、ちゃんとこの地域の全部の計画相談支援事業所を回って、一件一件相談に乗ってくれていますしサービス等利用計画にも赤ペンを入れて、いつも困っている事例の見立てもしてくれてますよ。計画相談で携わっている方で『これは難しい、とても太刀打ちできない』というときにも、基幹相談の相談支援専門員が同行することになったら、必ず福岡さんも一緒に来てくれて、困ったときには助言してくれたじゃないですか。」と言ってくれました。

計画相談が生きた仕事になるためには、委託相談や基幹相談センターなどからの助言やスーパービジョンが欠かせません。一人で抱え込み、「これでいいのだろうか」と迷い続けるのではなく、「一緒に考えよう」「別の見方はないだろうか」と支え合える関係性が必要です。そんな環境があってこそ計画相談は単なる書類作成ではなく、当事者の暮らしに新たな可能性をもたらす仕事になるのです。

５．地域協議会が育む連携文化

地域が本人中心に動くかどうかは、事業所同士の関係性に大きく左右されます。自立支援協議会は、そのための重要な場です。会議の中での議論だけでなく、終了後の立ち話や何気ない情報交換から、「この人には別の事業所の方が合うかもしれない」といった具体的な連携が生まれます。

事業所は利用者のために存在するのであって、利用者が事業所のためにいるわけではありません。

この当たり前の価値観を地域全体で共有し、学び続けられるかどうかが、支援の質を大きく左右します。

協議会が「やらなければならない場」ではなく、「集まりたい場」であり続けること自体が、重層的な相談支援体制が健全に機能している証だと、私は思っています。

皆さんの地域の自立支援協議会を振り返ってみてください。自立支援協議会が活発なところは、ミクロ（個別支援）とメゾ（中間層）、マクロ（行政や組織レベル）の連携がとれています。特に重要なのは、各組織の中間管理職であるメゾがサッカーでいうボランチのように、現場の課題を管理職であるマクロへつなげていけているかという部分です。この連携がうまくとれていない場合、支援会議がケース会議になり、本人を何とかしよう、事業所に頑張ってもらおうという堂々巡りとなってしまいます。

日々のケースから見えてくる個人の努力では解決しきれない課題をメゾが言語化し、マクロへ共有することで、地域レベルで課題を解決する方向へつなげていけるのです。

６．地域を振り返るための視点として

最後に、皆さんそれぞれの地域の相談支援体制を、ぜひ振り返ってほしいと思います。

これが今日一番お伝えしたかったことです。皆さん、この後、終わったときに、フロアで気の合った者同士で立ち話してみてください。「どう、うちの地域。だから駄目なのよ…」なんて感じで、こういう立ち話が二、三できたら私も嬉しいです。

立ち話が大事ということは、みんながその課題を抱えて、何とかしたいと思ったからです。この立ち話が立ち話になり、それが立ち話で終わらず、だんだん花を開いていくのが自立支援協議会。分かりますかね。別に大ぶりで集めなくても、Ａ事業所とＢ事業所とＡ相談とＢ相談が立ち話を始めるところで、これでもう一つのミニ自立支援協議会と言えるのではないでしょうか。

皆さんの地域の相談支援体制を振り返ったとき、皆さんはどう感じるでしょうか。重層的相談体制が構築できているか。誰も無視できなくなって顕在化されてしまうような課題を、潜在状態に留めておける多職種の連携ができているか。計画相談の担当者が、心が動く仕事ができているか。事業所のための利用者になっていないか。協議会がミクロだけで何とかしようとしていないか、メゾが機能しているか、マクロとつながっているか。計画相談は「重層的相談体制が豊かな土壌に咲く花」です。あなたの地域の計画相談は、地域で花開いていますか。